

---

# 社会福祉士養成校教員研修プログラムの開発に関する研究

## —模擬演習を用いた教員研修のあり方—

和田 光 一  
筒井 澄 栄  
西 川 ハンナ

---

### 1. はじめに

「福祉専門職の教育課程等に関する検討会報告書」（1999年）において、社会福祉士の養成カリキュラムは、より実践的な援助技術の習得に必要性が示され、2001年から援助技術演習では、内容の改善や履修時間の倍増が図られることとなった。これに伴い多くの演習担当教員は授業時間数への対応や授業内容の改善が求められているが、その対応は教員の裁量となっている。

社会福祉士養成を行う教員の研修については、「福祉専門職の教育課程等に関する検討会」の委員を中心とした「社会福祉教育方法・教材開発研究会」が組織化され2000年から高校と大学等の教員に対して模擬授業を中心に行うソーシャルワーク実践研修講座が開催されている<sup>1)</sup>。大橋<sup>2)</sup>は、急増中の社会福祉系大学における教員への影響と近年の大学教員の傾向について触れ、多くの教員自身が社会福祉教育を受け実践し、社会福祉の現場を十分理解しているとは言い難いと指摘している。さらに、近年の福祉系学科や専門学校の乱立により教授経験の少ない教員が増加し、教育機関は教員の教授法や指導法についての教員側に求められる一定の力量、いわば伝達方法の「質の担保」を問われかねない現状に至っている。教員需要の拡大から社会福祉現場の社会福祉士等の人材が教育現場へとシフトしていくなかで、社会福祉援助技術の教授における様々なメリットやデメリットが生じているといえる。

このように社会福祉援助技術演習に関して論ぜられる際に、その科目自体の曖昧さや演習自体の個別プログラムや教材については研究がされるようになってきた。そして、その研究範囲は幅を広げ、中根 真<sup>3)</sup>は、学習者（つまり、学生・受講生）中心の視点についての重要性を論じている。また、福山<sup>4)</sup>は社会福祉の専門家の現任訓練を考える中で専門知識・技術・価値のインプットとアウトプットについて論じ、効果的なインプットという視点について言及している。確かに、学習者への援助技術や理論の伝達には教授者の演習観といったバイアスが懸かる。教員というフィルターを通して伝達される『社会福祉援助技術』や『演習の目的・意味』が各教員間で異なれば、同じ教材やプログラムでも、学習者に伝わるものは方向性を異にするのではなかろうか。今後は具体的に演習担当教員に的を絞りそこから演習を捉えるという視点が必要である。

西川ら<sup>9)</sup>の調査報告で指摘するように、演習担当教員は、自分の教授法や展開するプログラム内容への不安や、自身の行う演習が標準レベルを満たしているか否かという不安を持っており、現状の改善を模索している。このような現状を踏まえ、本研究では演習担当教員の抱えるこれらの不安をいかに軽減し、演習に関する質の向上を図るための方策のひとつとして、社会福祉士養成教員研修プログラムの模擬演習の有効性について検討を行なった。

## 2. 研究の対象と方法

東京社会福祉士会では、社会福祉士養成に携わる会員を中心に「社会福祉援助技術演習研究会」を行なっている。活動内容は、汎用性の高い演習プログラムの企画、実行する能力の向上、演習教授の質の向上などを目指し、月に一度定期的に参加者が自ら模擬演習を行ない、討議・検討を行なっている。

今回、この研究会に所属する43名を対象に、以下の3点について検討を目的にアンケート調査を行なった<sup>10)</sup>。

- 1) 社会福祉援助技術演習担当者がどのように演習を捉え、実践しているのか各人の不安要素を調査することから伝授者側の演習観を明らかにする。
- 2) 今後の社会福祉士養成教員の不安の軽減や演習に関する質の向上を目的に、模擬演習を用いた研修の効果について検討する。
- 3) 模擬演習参加教員の効果実感の差異を明らかにし、効果的な対象やプログラムの内容を明らかにする。

調査の項目は、回答者の基本属性（性別、年齢、福祉現場経験年数、所属の種類）、研究会の参加頻度と意欲、演習を実施するに当たっての課題、「参加に関する動機」「演習教授に関する困難」「参加の効果」「意義があった具体例」「意識の変化」「期待と異なったこと」「今後の課題」等の項目である。

## 3. 結果

アンケートの回答者数22名回収率は51.2%であった。

所属機関では、福祉系大学6名（27.3%）、福祉系短大2名（9.1%）、福祉系専門学校・専修学校4名（18.2%）、社会福祉士養成施設（通信制）5名（22.7%）、短期養成施設1名（4.5%）、その他が4名（18.2%）であった。

社会福祉現場経験年数は、5年未満が2名（9.1%）、5年以上10年未満が6名（27.3%）、10年以上15年未満が6名（27.3%）、15年以上20年未満が2名（9.1%）、20年以上は5名（22.7%）であった。

## 1) 演習の教授の困難な点

演習に関して、担当教員の抱える課題としては、自由記載で22名中17名が記述している。回答は「教授者の問題」「受講者・学生（受け手）の問題」「演習自体（プログラムや範囲）の組み立て」「システム（社会福祉士養成課程自体の課題や演習との関連性）」に分類でき、集計を行った。集計結果は「受講者・学生（受け手）の問題」が9名（40.9%）、「演習自体（プログラムや範囲）の組み立て」が9名（40.9%）、「教授者の問題」が3名（13.6%）、「システム（社会福祉士養成課程自体の課題や他科目との関連性）」が2名（9.1%）であり、受講者のレベルに応じた演習の内容と展開、プログラム間の関連性などについて難しいと考えている。

## 2) 研究会参加動機と効果

研究会への参加動機は、「演習の進め方を学びたかった」が14名（63.6%）、「より良い教育方法について討議したかった」が13名（59.9%）、「演習のレポトリを増やしたかったから」が10名（45.5%）、「他の人の授業が見てみたかった」が9名（40.9%）、「演習を行なう上での理論的背景を学びたかった」・「横のつながり，交流を持ちたかった」が7名（31.8%）、「自分の授業にアドバイスをもらいたかった」が4名（18.2%）である。多くは自分の行っている演習に対する疑念に関するものであった。

参加後の効果としては、「演習の進め方を学べた」・「他の人の授業を見ることができた」・「横のつながり，交流を持てた」が19名（86.4%）、「より良い教育方法について討議できた」が10名（45.5%）であり、すべての項目において回答数が増えている。

参加動機の有無と効果実感について、意識をして参加した会員と意識をしなかった会員との効果実感を比較した結果、「授業の進め方を学びたかった」「よりよい教育法について討議したかった」「レポトリを増やしたかった」の4項目に関しては、その項目を参加当初の目的にしていた会員のほうが、効果があったとしている（図1）。

参加目的ごとの総体的効果実感について、参加動機項目別に見ると、効果を高く感じているのは「自分の授業についてアドバイスをもらいたかった」（平均96.4%）と回答した会員で、一番低いのは「他人の授業の様子をみてみたかった」（平均77.1%）と回答した会員であった（図2）。このことから、自分の授業に対して助言を求める参加者にとっては模擬授業形式の研修は多角的に効果を感じることで満足度の高い研修プログラムだと考えられる。

演習の教授の困難な点および研究会の参加動機項目、参加効果についてクロス集計を行なったところ、教授上の困難として「受講者・学生（受け手）の問題」としてあげていた参加者と、そうでない参加者の参加者で「他の人の授業の様子が非常に参考になった」に賛同するか否かで優位な差が見られた。

所属による演習観について、福祉系大学，福祉系専門学校・専修学校，社会福祉士養成施設（通信制），「4年制大学教員」，「通学制教員」，「通信制教員」に分類し，グループごとに「演習を行うに当たっての困難」「参加後意義があった具体例」「参加後の意識の変化」の自由記載から所属機関別に分析すると，演習の捉え方は各教員の所属養成機関により特徴的な傾向が見られた（表1）。

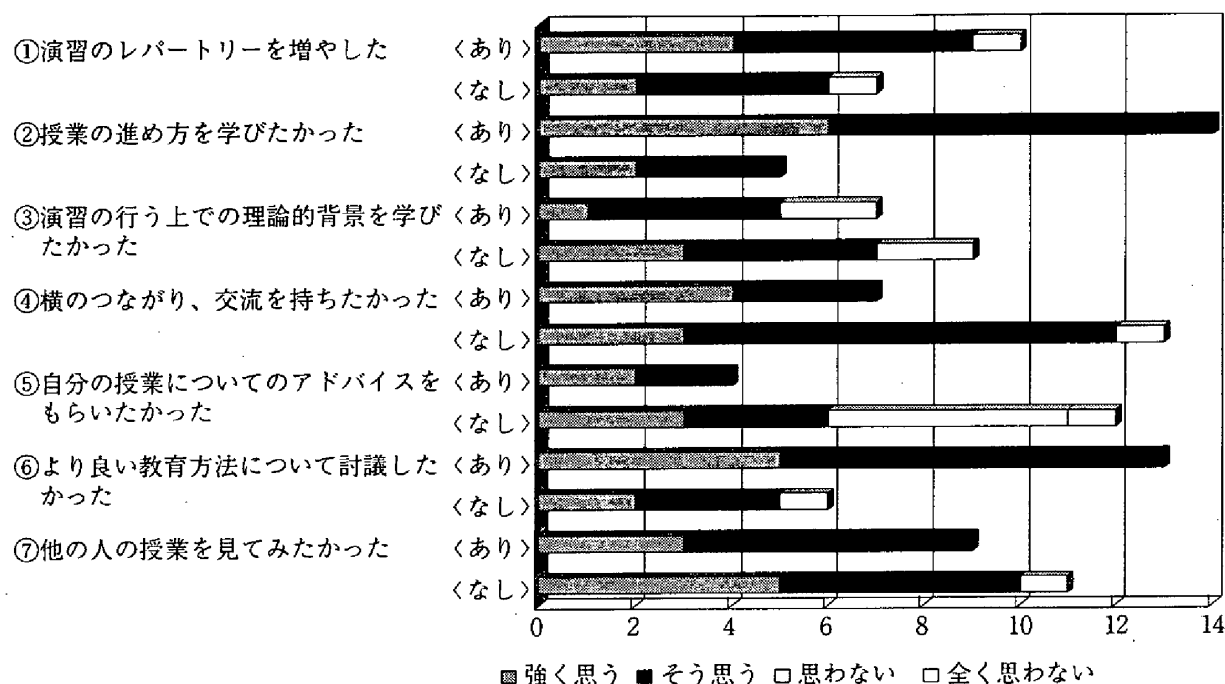


図1 参加動機と効果

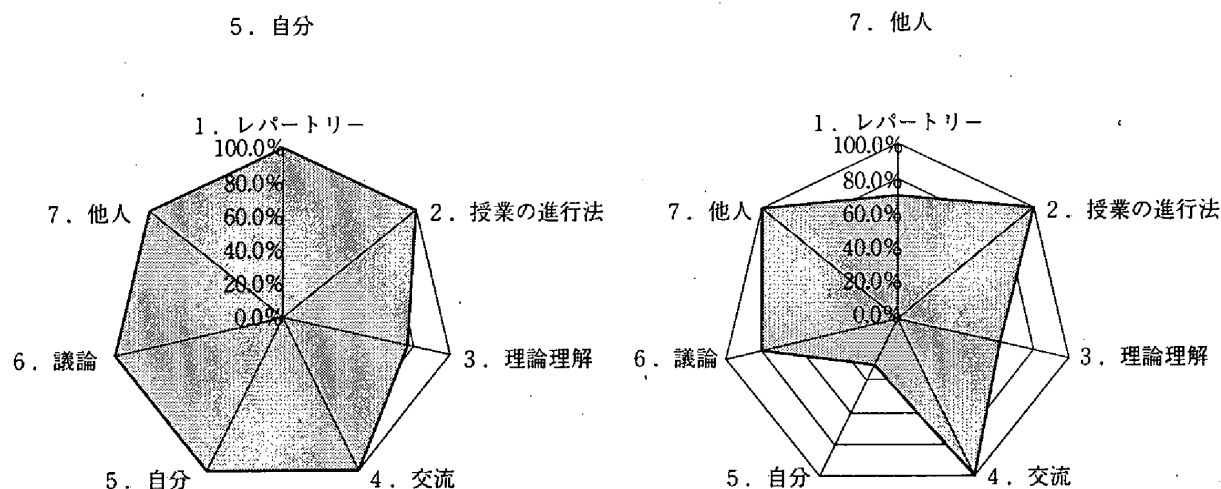


図2 「自分の授業についてアドバイスをもらいたかった」参加者と「他の人の授業の様子を見てみたかった」参加者の総体的効果実感

#### 4. 考察

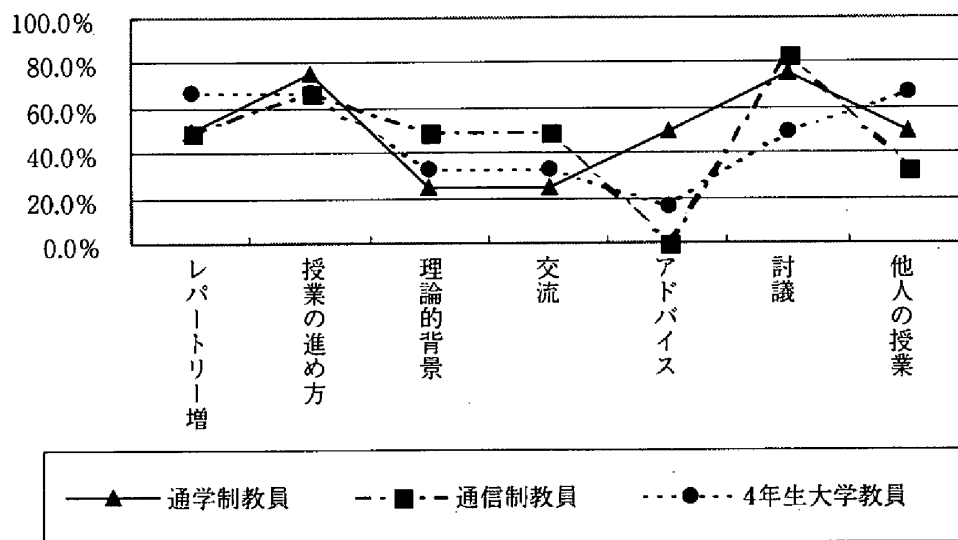
研修会は、最新の情報収集や情報交換の場であり、自己研鑽の機会であると位置づけられる。しかし、その多くは座学であり、一方通行の講演形式のものであり、とくに社会福祉援助技術演習担当教員の研修プログラムとして、このことだけでは教員のニーズに応えきれぬのは疑問である。近年、社会福祉現任者の研修においてもロールプレイやディスカッション等演習的な要素が取り込まれるようになってきている。今回の調査では、「より実践的な援助技術の習得」を求められている

表1 問題の所在と研修効果

	他の人の授業の様子が				合計
	非常に参考になった。	強く思う	そう思う	思わない	
受講者・学生 (受け手)の問題	なし	6	1		7
	あり	1	7	1	9
	NA	1	3		4
合計		8	11	1	20

(P,0.05)

所属機関別の参加動機



社会福祉援助技術演習担当者の不安や戸惑いの要因は所属などにより，このことから演習に対する考え方に差異が見られることが明らかとなった。これらを踏まえ，担当者の抱える課題の解決のための模擬演習を用いたプログラムのあり方について考察を行う。

#### 1) 演習担当教員の抱える課題への対応

演習教授の課題を，「教授者側の問題」と考える教員は，演習において，その根底を支える価値や理論を教授者自身が，不確定と感じている。このことは，受け手に当たる受講生に教授者の困惑したアイデンティティーが曖昧なまま伝達されていく可能性があるといえる。演習課題を「受講者・学生（受け手）側の問題」と，考える教員も模擬演習形式の研修を体験することにより，汎用性の高いプログラムの提示や，多角的な視野に立った授業展開の体験が，自分の演習授業への多くのヒントを得，授業全体の捉え方に「幅が出来た」（アンケート回答引用）と考えられる。

演習自体（プログラムや範囲）の組み立てについてはまさに，現在に至るまで福祉教育においては，教員の職人技に近い個人的力量に頼ってきた部分が多い。教授法や年間計画等も個人が確固たる自信や統合性をプログラムされているとはいえない。

演習に組み込むべきだと思っても取り組みがなされていない範囲のプログラム，関わりの希

薄な分野について一個人の体験では伝えきれない範囲のいわば不得意分野について学習の機会の要望、自分の行っている演習に対しての評価やレベルの確認等、共に演習を行う教員間の教授技法の討議や相互研鑽、標準化が求められている。

## 2) 潜在的研修ニーズおよび研究会参加効果

参加後の効果は全項目において効果があったとする回答が増えている。このことは、参加した当初には考えられなかった気づきや意識が生じていると考えられる。この結果から推察すると、研修や相互検討などの必要性を感じていない者にも潜在的な研修の必要性があるといえる。

特に「授業の進め方を学びたかった」「よりよい教育法について討議したかった」において顕著であった。これは模擬演習形式の参加型研修に対して、「授業の進め方を学びたい」「討議したい」という意欲のある者に対しては特に満足感が高い。調査結果からも積極性と参加効果実感は比例すると考えられる。

参加動機と成果について参加動機以外の効果として、参加時考えていなかったが、効果を実感している項目に「演習を行う上での理論的背景を学んだ」「横の繋がり、交流を持った」「自分の授業にアドバイスをもらった」「他の人の授業が参考になった」があげられている。顕著なものは、「横の繋がり、交流を持った」という項目のいわば教員のネットワークが築かれることの価値や重要性を確認したと考えられる。これは参加以前には意識化されていなかったものであり研修に参加して初めて顕在化したもの、つまり潜在的な研修のニーズが明確となった。

## 3) 所属による演習観の相違に対する対応

所属機関別に分析すると、演習の捉え方は各教員の所属養成機関による演習観の相違は、4年制大学では、演習を広義のソーシャルワーク、ソーシャルワーカー養成の一方法としてとらえており、通信制専門学校では短期間であるため量（数）よりも質（対面事業でのコミュニケーション重視の学習の場）と考え、通学制専門学校では、実習への向けての導入、実践現場への導入部分と捉える傾向が認められた。

また、研修での意義があった点においても、所属による差が認められた。4年制大学では、「レパートリーが増えたこと」といった回答が得られた。これは新カリキュラムによる時間数の増大による需要だと考えることができる。通信制専門学校では、「教える機会が少ないので教授方が参考になった」、通学制専門学校では「第三者の評価・展開方法を学び視野が広がった」といった回答が得られた。通信制・通学制専門学校所属の会員とも交流に関して効果があったと100%実感しており、これら所属教員のネットワークの希薄さや相互評価や討議の機会の必要性があげられる。

## 4) 模擬演習形式による研修の課題

模擬演習形式における研修の効果を多角的に探ったが、この形式は万能というわけではない。アンケート結果からも、「自分の授業に対してアドバイスをもらえた」「演習を行う上での理論的背景を学べた」の項目の効果実感は他項目より低かった。

模擬演習形式に於いて効果を得にくい点は自分が模擬授業を提供すれば授業に対するアドバイスを得ることができる，しかし，自ら授業を示す機会が無ければ自分の教授法に対してのアドバイスを得られず，集団におけるダイレクトな受益者は少ないという点と，模擬演習形式から理論的背景を直接学ぶことは難しいという演習形式における研修の課題もあげられる。

今後，社会福祉士養成教員の教授力の強化を意識した，開かれた教授方法や演習プログラムの検討の場としての自己の演習の開示も含めた模擬演習形式の研修が必要である。また，教育現場と実践を繋ぐ，現場に主軸をおく教員の模擬演習形式の研修に参加できるシステムづくりおよび調整もおろそかにはできないと考える。質の高い社会福祉士の養成または，質の保証された社会福祉士を養成するためには各種機関別の効果や，教員個人の力量に依存しない，社会福祉援助技術演習において社会福祉士としての援助技術を伝える力を強化する研修プログラムの必要性がある。

## 5. おわりに

社会的要請を受け社会福祉従事者の養成が急務であった近年，需要に応え社会福祉士養成校も急増した。しかし今，実力ある社会福祉士を輩出するには，教員側の養给力さえも充分とはいえない。そこで，社会福祉士養成教員の研修プログラムの開発として，模擬演習形式の研修の有効性を「社会福祉援助技術演習研究会」の参加教員によるアンケート調査により明らかにした。模擬演習形式の研修は①演習の質の向上・自己研鑽に関心の高い教員に対しては高い効果実感を与えている。②自分自身の授業の課題を明確に持てない消極的な参加者ほど模擬演習形式の研修が多角的に学ぶ良い機会となりうる。さらに，教員間の差異が生じている，『演習観のぶれ』を埋める共同作業として「示して見せ討議する」形式の福祉教育方法的な演習手法が教授側にも効果があることも示唆している。

また，教員の所属機関の演習設定状態により，演習の捉え方も異なる点に着目したことも本研究においての新たな視点である。教員の力量が科目に直結して反映される演習こそ各社会福祉士養成教員がネットワークを形成し相互研鑽することが社会福祉士養成の資質を左右する要であることを教育機関も重視すべきである。

本研究の結果をもとに，福祉現場で求められる援助技術を理解・体得できるような演習プログラムを，教育機関だけが開発するのではなく，現場のワーカーや教員が共に共同開発していくことも期待される<sup>7)</sup>。それらを開発すべく現場の社会福祉士と実践的な演習プログラム開発に向け，現場で求められる社会福祉援助技術の教育研修に関する調査研究を次の課題としたい。

（わだ・こういち つくば国際大学産業社会学部社会福祉学科）

（つつい・すみえい 岡山県立大学保健福祉学部保健福祉学科）

（にしかわ・はんな ルーテル学院大学大学院

社会福祉学専攻後期博士課程）

注

- 1) 2004年度より社団法人日本社会福祉士養成校協会は、独自に「社会福祉士養成校教員研修事業(全国研修)」を開始することとなった。
- 2) 大橋謙策「転換期を迎えた大学の社会福祉教育の課題と展望」『社会福祉研究』第86号鉄道弘済会 2003年22-29頁
- 3) 中根 真「社会福祉専門教育の諸問題とその課題(その1)～社会福祉援助技術演習に焦点をあてて～」関西大学紀要 No.3 2001年、75-101頁
- 4) 福山和女「社会福祉の過渡期にみる専門職への現任訓練」『ソーシャルワーク研究』Vol.26 No.1 相川書房 2000年 19-25頁
- 5) 西川ハンナ・澤伊三男・保正友子(「社会福祉士による社会福祉援助技術演習研究会の効果と展望—社会福祉援助技術演習研究会参加者へのアンケートに基づいて—」2002年日本社会福祉学会第50回大会口頭発表)
- 6) この調査は東京都社会福祉士会の社会福祉援助技術演習研究会の協力を得て、2002年5月から6月にかけて行った。
- 7) 社団法人日本社会福祉士養成校協会・研修委員会 社会福祉士養成校教員研修プログラム基盤構築事業 2002年度研究事業報告書においても、『「社会福祉援助技術演習」担当教員の研修・教材開発ニーズ調査』が、教員を対象としたアンケートが行われた。



## Research on development of service training of teachers program of certified social worker training school.

— It thinks about the ideal way of service training of teachers that uses a mock training —

Koichi Wada, Sumiei Tsutsui, and Hanna Nishikawa

The training of man power that fills the welfare needs in the aged society is a pressing need in our country. However, not only the amount of man power to the welfare service but also qualitative fulfillment came to be requested.

And, it is necessary to advance the research on the teaching method of the teacher who will be the leader of the certified social worker training program when the future though the certified social worker training education program was improved.

In this research, it was examined whether social work training professor's problem was clarified for the teacher who took charge of the social work training in the certified social worker training school, and the training program of the mock training style was effective as these problem solving method.

The research method did the questionnaire survey for 43 people who belonged to "Social work training society" that centered on the teacher involved in the certified social worker training.

The number of questionnaires of those who answered is 21 people. The collection rate was 51.2%.

The result was classified into four "Problem on the taught side", "Those who attended a lecture and student's problems", "Assembly within the program and the range", and "System" as a difficult thing of the professor of the social work training.

It has been understood that the participant where the training of a mock class has It was a training program. high potential needs of the satisfaction rating also thinks by taking the training of the mock training style in the participant who sought advice for its class aiming at the improvement of the training skill.

Moreover, it was clarified also that the idea of the training was different according to the teacher's belonging.

Key Word: Certified social worker, social work training, FD (Faculty Development) teacher